



# 『生きること・働くこと・学ぶこと』

～「教育」の再検討～ 田中萬年著

職業能力開発総合大学校 戸田 勝也

本著は職業訓練に身を置く立場から、教育を論じたユニークな書である。

田中萬年氏は昭和43年に職業訓練大学校を卒業し、長崎総合職業訓練校に2年間勤務し、昭和45年に当時の職業訓練大学校調査研究部に在籍し、現在は職業能力開発総合大学校指導学科の教授である。この間、一貫して職業訓練の研究を行い、「わが国における公的職業訓練とそのカリキュラムの歴史的展開に関する研究」で博士号を取得している。著者が長い職業訓練の研究生活で常に思い続けてきたことをまとめたのが本書である。

本書ができ上がる過程で、著書の名称が変わったことを隣室にいる私は知っていた。初めは『「教育」による呪縛』であった。出版の段階で「生きること・働くこと・学ぶこと」に変更されている。このことから著者の本当に訴えたいのは、教育による呪縛（物事にとらわれること）ということではないだろうか。

「まえがき」に次のように書かれている。

“学校における諸問題と、社会での若者の新たな行動は密接な関係があると思われる。このようなことは、「教育」の言葉に日本人が囚われていることにより派生する結果だといえる。すなわち、人として生き、働き、学ぶこととの関係をトータルに認識していないことに原因があると思われるのである。

このように「教育」に囚われている日本人が「教育」をどのように誤解しているか、あるいは盲信しているか、について本書では紹介する。特に、「学ぶこと」（教育）を「生きること」・「働くこと」



と切り離してとらえていることについてである。

その誤解の内容を知ることができれば、「教育」による呪縛を解き放ち、あるいは「教育熱」にうかされている人を解熱できるはずである。”

本書の全体像を示すために目次を次に示すことにしよう。全体は11章にわたるものである。

序章「生きること・働くこと・学ぶこと」と「教育」、第1章 明治の親達はなぜ学校を焼き打ちしたか、第2章 「教育」とは中国語か、第3章 「教育」は“Education”か、第4章 「教育を受ける権利」は世界の共通認識か、第5章 「教育」は個性を尊重できるか、第6章 教育の機会は均等か、第7章 「勤労を重んじる」ことは教育目的になるのか、第8章 教育で「生きること」を保障できるか、第

9章「知育偏重」観をなぜ克服できないか、第10章「教育」類似用語はどのように生成されたか、第11章「教育」では教育は改革できない、代わりに

第1章では、明治期における学校がどのようにに成立したか、から論じられる。わが国の教育風土が先進諸国と異質な展開を歩んだ特色は、学校教育による「立身」出世を政府が国民に奨励したことである。何故に政府はこのような立身出世を目標にした就学を鼓舞したのであろうか。それは国民が「学問」に対し必ずや反対運動を起こすことが予見されたからではなかろうか、と見ている。

そして、貧しい国民の多数は学校による“立身出世”を直ちに信用せず、“学校焼き討ち事件”が全国的に広がった。その理由が論じられている。

庶民は「教育」の文字を「学制」によりほとんど知ることはなかったのではなかろうか、と思われるのである。庶民は「立身出世すればこそ学問だ」という理解だったのである。

第2章、第3章では「教育」という用語の厳密な検討がなされる。わが国において「教育」という用語がどのように使用されたかについて歴史的に記述されている。「教育」という用語が中国から伝わったものではないことが論じられている。第3章では、「教育」は“Education”ではないことが論じられる。われわれは普段、両者は同じものだと思っているので、この点の理解をするには少し時間がかかる。つまるところ、“Education”の鍵概念は「職業」と「開発」である、としている。

第4章では、「日本国憲法」にある「教育を受ける権利」は日本人が書いたもので国際規約にはない、としている。そしてわが国の教育権論は根本的に再検討しなければならない、と述べている。

第5章では佐藤忠男氏の“学習権の論理”を引用して、個性を尊重するとはどのようなことか、を論じている。

第6章は教育の機会は均等かを論じている。主として、戦後の“教育の機会均等”論の問題が取り上げられており、公共職業訓練と工業高校の連携制度であった神奈川県技術高等学校への批判の検討が

なされている。

第7章では、“勤労を重んじる”教育とは何か、教育による弊害とは何か、職業に就くことを尊重しない日本の学校教育という節で構成されている。

第8章では、教育権論における職業の無視、国際規定における労働の位置づけ、教育は学校だけで行っているのではない、“幻想”を振りまく戦後の教育論、職業を分離した“学問の自由”が論じられている。

第9章では“モノづくり学習”は教育よりキョウイク的である、モノづくりは楽しい学習である、“知育偏重”に対する理論は“モノづくり学習”論である、近代化の過程におけるモノづくり学習の軽視、戦後の民主化過程におけるモノづくり学習の軽視、科学至上主義によるモノづくり学習の軽視、モノづくり学習を整理できない「教育」論、フェラーリを造る機械をだれが作っているか、“知育偏重”は後進国の証である、という節で構成されている。

第10章は「教育」類似用語はどのように生成されたか、である。

第11章は「教育」では教育は改革できない、である。ここでは、“これまでもわが国の「教育」についての改革がさまざまに論じられてきたが、それらはわが国特有の「教育」観を前提とした改革案だったのでなかろうか。その結果、いまだにわが国の教育の改革が進んでいないのではなかろうか”と述べている。

そして、“明治から始まった近代の教育をのり越えて新たな世紀の「キョウイク」を創造しなければならない”と結んでいる。

学校教育が混迷をしている今日、教育を根本から考え直す必要があると思われる。本著は職業訓練の領域から教育を見ているもので、いわゆる教育学者が書いたものとは違った見方が出ていると思う。教育とは何か、職業訓練・職業能力開発とは何か、を考えるに当たって職業訓練に携わる皆さまにご一読をお勧めしたい。

(「技術と人間」刊、2002年4月、四六判246頁、1,400円)